

## 神奈川産学チャレンジプログラムへ参加して

穂 積 和 子

### 1. チャレンジプログラムとの出会い

経営学部では1年次から必修として少人数制でかつ学生達が主体的に臨むことのできる演習カリキュラムが用意されている。2,3,4年次にもゼミナール演習科目があり、4年次には卒業論文の提出が学生全員に義務づけられている。

筆者のゼミでは学生達は3年次に基本的な知識を学習し、3年次の春合宿までには各人の卒論テーマを見つけ、4年次から卒業論文作成用のための研究に取りかかる。しかし「テーマ探し」は難しく、学生達が選択したものがすでにやり尽くされたテーマである場合もあり、テーマを見つけてから実際に論文を書き上げるのは締め切りぎりぎりになるのが通例であった。学生達からは早く取りかかればもう少し良い論文が書けたのではないかと後悔しているという感想を良く聞いていた。筆者の思いも同じであり、締め切りはなんらかの成果を出すために必要なものである。しかしなかなかそのような機会は無く、何か良い方法はないか、他大学のゼミのやり方などを収集していた。この数年続けていた他大学との合同論文発表会や平塚祭での中間発表会ではあまり刺激を受けることは少なかったこともあった。

2004年度の3年生のゼミでは、5月13日にビジネスショー見学と3・4年生との合同コンパを行い、グループ毎の発表テーマも決まり、本格的なゼミ活動が始まっていた。たまたま通りかかった学生用の掲示板に「神奈川産学チャレンジプログラム」の案内を見つけたのは5月31日だった。神奈川経済同友会と県内の5大学で協同して、学生同士の研究レポートのコンペがあることが掲示されていた。これは学生に締め切りを与えることのできる良いチャンスではないかと思い、6月3日のゼミの授業の際に、このことを伝え、学生達に参加しようと呼びかけた。学生達は既に自分達の興味にしたがって調査研究を始めており、それを中止して行うことにつ

いて多くの学生が反対した。筆者は趣旨を説明し、「テーマを探して研究するのは難しい。与えられたテーマで研究し、研究方法を学習した後、卒論テーマ探しをして各自の卒論を書く方が楽だと。論文を書く練習ができ、さらに良い成果ができれば賞金も得ることができると」。学生達はしぶしぶながら同意してくれ、同日、産学連携室に学生達が選択したテーマとメンバ名を連絡した。

学生達が選択したテーマと参加者名は表1のとおりである。8グループ、24名が挑戦した。

表1 チャレンジプログラム参加テーマ一覧

企業名	テーマ	代表者	氏名	氏名	氏名
江ノ島電鉄(株)	江ノ島の魅力付けと集客向上のための活性化策	太田裕樹			
神奈川トヨタ自動車(株)	カーディーラーにおけるe-コマース戦略の立案	上野喜之	伊藤朋也	坪崎 順	高田大資
京浜急行電鉄(株)	携帯電話を用いた新鉄道サービスの検討	高橋慶二郎	萩原弘幸	谷口和也	佐藤敏行
京浜急行電鉄(株)	駅構内無線LANによる新規事業の検討	小山真史	島崎 純	中村泰輔	
京急文庫 タクシー(株)	タクシーの利用者実態調査と新規事業提案	佐藤研一	高橋大樹		
(株)京急 アドエンタープライズ	新しい時代の鉄道広告	石 次朗	伊藤匡史	須永道政	
(株)CFSコーポレーション	ドラッグストアの取扱商品とその購買分析	矢ヶ崎宏俊	田口雄治	鈴木佑志	
(株)CFSコーポレーション	「これからのドラッグストアに求めるもの」の提案	下山 桂	小柴麻美	酒井詩帆	細田奈美

## 2. 神奈川産学チャレンジプログラムとは

チャレンジプログラムは社団法人神奈川経済同友会の会員企業が日常の経営課題の中から実践的な研究テーマを提示して学生の募集を行い、提出された研究レポートを審査して優秀な研究を表彰するものである。2004年度が第一回の開催であり、

横浜国立大学、横浜市立大学、関東学院大学、東海大学、神奈川大学の5校に対して募集がかけられた。目的は「人材育成」であり、学生が主役のプログラムで、大学で学んだものに独創性をプラスして力量を存分にアピールすることが期待されていた。

応募資格は原則としてグループ単位であり、2004年度に3年生である学生が対象であったが、個人でも他の学年でも参加は可能であった。応募が締め切られた後、各企業がテーマ毎に学生に対して説明会を開いてその趣旨が説明された。研究テーマの締め切りは10月末日であり、11月には学生達は企業に行ってプレゼンテーションを行い、審査を受ける。優秀なチームに対しては神奈川経済同友会とテーマ提示企業が12月に表彰するというものであった。

提出するレポートはA4で20ページ以内（表紙、目次を除く）と注釈や資料は10ページ以内であり、学生達にとってはボリューム的に大きいものであった。

### 3. チャレンジプログラムに参加して

#### 3.1 夏合宿まで

6月中旬頃から企業から説明会開催の通知が学生達にあり、学生達は企業に行つて、各テーマについての説明を受けてきた。多くの大学のグループが応募した企業のテーマもあれば、そうでない企業もあったようである。

学生達は自分達のテーマについて研究レポートが書けるように勉強を始めた。しかし多くは新しい事業を提案することであり、調査研究だけでは駄目なことは明かであった。そこで、アイデア出しのためにKJ法を用いてアイデア出しを行つた。5グループに分かれて、自分達のアイデアをまとめたものを発表してアイデアを競い合った。面白いものを出そうという意欲があり、結果として利用できるアイデアもたくさん揃つてきた。一人では考えつかないことをブレインストーミングやKJ法で見つけだすことができることを学習した。しかし申し込んだテーマが8個もあったため、全てのテーマのアイデア出しには1ヶ月がかかった。その間、アンケートを用いて分析した方が良いテーマもあり、アンケート分析のための授業も行つた。しかし十分な調査もできないまま夏休みに入り、8月末の富士見研修所での夏合宿までの宿題となった。

夏合宿までに学生達は主体的に考え、様々な活動をしていた。

京急の無線LANグループは無線LANが社会でどのように使われているか分からな

かった。そこで無線LAN付きのパソコンを持って東京の喫茶店や駅に行って実際に使ってきた。

トヨタグループの説明会ではトヨタがすでに行っている企画書を貰ってきていた。その内容は素晴らしいものであった。学生達はそれ以上のことができるかを悩んでいた。すると神大経営学部の卒業生を伴って会社の方が大学を訪問して下さり、若者のアイデアが欲しいのだから、君たちが考えてくれたことを出してくれれば良いと言って下さった。学生達の不安も吹き飛んだようであった。

HAC提案のグループはグループ員達が住む近くのHAC店舗や他のドラッグストアに行って、店舗の雰囲気や品揃え、サービスなどを調べて比較表を作成した。

HAC分析グループはレシートを分析するため、新横浜店に行って何日かをレシートを電卓で計算することを行なった。POS電子データがあるのではないかと思ったので会社と交渉し、守秘義務契約書を結んでCDでデータをお借りした。学生達は商品コードの実際などを理解し、膨大なデータの分析を開始した。

京急タクシーグループはタクシーに乗ったことが無いということからタクシーに乗ることから始めたそうである。学生達は夏休み中に自分達でアンケートを作成し、3つの駅周辺で通勤客などにアンケートを配布して協力を依頼して収集した。横浜駅でアンケートを配布していたら警察官に注意されたこともあったようであった。

京急携帯電話グループは夏休み中にすでに企業で中間報告をさせられていた。中間報告では他大学が行ったしっかりした報告を聞いて大いに刺激を受けたようである。彼らは自分達で電子掲示板を作成し、それを使ってどのように研究を進めるかを大いに議論したそうだ。

その他、他大学の参加者達との打合会を含む交流会を行なったグループもあったそうだ。学生達は企業と連絡を取りながら、自分達で考え、行動を始めていた。

### 3.2 研究レポート提出まで

8月20日から22日まで富士見研修所で行った夏合宿にはほとんどの学生が参加した。学生達にPowerPointで発表をさせたところ、多くのグループが大量のPowerPointを作成してきていた。調査できることは何でもやってきたという感じであった。教員が言ってもなかなか腰が上がらない学生達が、他大学との競争という場面が与えられて頑張ったという感じがした。学生達は夏休み中にグループ毎に集まって大学で作業や調査を行なったとのことであった。

しかしそれらはまだ論文を書き出す段階にはなっておらず、足りない部分などや

問題点をみんなで話し合った。指摘されたことを元に学生達は持ってきたノートパソコンに向かって夜遅くまで、というより朝まで作業を行っていた。富士見研修所は夜中の研修室の利用について大目に見てくれるので助かる。また研修所に今回からインターネットが利用できるパソコンが設置されたのでこれも調査を深めるのに役に立った。夏合宿で足りなかった部分については夏休み明けまでに完成させ、論文を書くように伝えて夏合宿は終わった。

新学期が始まると、学生達は教員からのPowerPointのOKを貰うことから始まった。構造がしっかりしていないと、文章を書いてもダメと言うことからである。アンケートを収集して分析を始めたらアンケートの問題が悪かったというグループが出てきた。最終的に3回も作り直して配布回収を行ったグループもあった。アンケート作りの難しさを理解したはずだ。また全年齢層からのアンケートを取りたいために、学生達の親の友達や会社にも配布して協力をお願いしたグループもあった。

学生達は10月30日の湘南ひらつかキャンパス平塚祭を利用した中間発表会に向けてPowerPointの完成版と10月31日締め切りのチャレンジレポートの完成に向けて忙しくなった。ほとんど毎日夜9時頃までは残って、みんなで原稿を書いていた。またグループ員の仲間の家で作業をしたようだ。最後の1週間は夜遅くまでというよりか、朝まで研究室に残って原稿の仕上げにかかった。教員も3日ほど朝までお付き合いすることがあった。また朝6時頃から次のグループが押し掛けてくるなど、学生達の真剣さには驚かされた。あるグループは教員からのOKが出た途端、雄叫びを上げて、構内を駆け回るといふ奇行を行ったが、朝の2時頃であったため、他の人に迷惑をかけることは無かったと思う。論文が完成するまでに20回以上は書き直しを要求されたグループもあった。また、提案だけでなくそれを実施したらどの位かかるかの収支をまとめるグループもでてきた。それを見て他のグループも取り入れることがあった。学生達はお互いに刺激しあいながら、より良いものにするために努力した。研究レポート完成に向けて楽しくも大変な作業を行った。

11月1日には7グループが、2日に1グループが研究レポートを産学連携室に提出して研究レポートの作成は終わった。

11月に入って教員がほっとしたのもつかのま、企業での発表会が始まった。中間発表会などで経験していたものの、他大学に勝ちたいために学生達はまたもや研究室で発表練習に励んだ。朝までPowerPointを書き直して練習し、一睡もせずにそのまま発表会に臨んだグループもあった。既に全員がプレゼンテーションが大事であることを理解していた。PowerPointは教員も驚く出来映えとなっていた。ほとん



どアニメーション化され、その出来に目を奪われて内容のチェックを忘れてしまうほどのPowerPointもあった。学生達は他のグループの発表練習を一緒になって見ていた。良いところは吸収しようと言う意欲が見て取れた。発表は企業によって発表日が異なったため、教員も少しゆとりが出てきた。

しかし企業での発表が終わると学生達はショックを隠しきれない様子で報告に来た。それは他大学の研究レポートは提案書となっていて、自分達のレポートは論文だったと。企業の人達も提案書が欲しかったようで、他大学を賞賛していたので、自分達は勝てそうもないという報告であった。学生達には今回のチャレンジは論文を書く練習であることを最初に言っていたのでそれを再度説明し、自分達の出来上がった作品を自分達で評価すれば良いと伝えた。学生達の不満は残っていたようであった。

その後、11月12日に成蹊大学と東京経済大学での合同ゼミ発表会で発表を行った。すでにチャレンジプログラムのために何度も練習をしたこと、PowerPointの完成度などから、我々の発表は他大学と比較してずば抜けていた。これには学生達は満足したようであった。

### 3.3 表彰式まで

11月26日に産学連携室からトヨタグループが優秀賞を得たという連絡を受けた。まさかと思っていたグループの受賞なので少し驚きと共に学生にメールで連絡した。その後、何回か連絡を受け、最終的に、1件の最優秀賞、4件の優秀賞を得たことが分かった。発表会の時には悔しい思いをして来ただけに、学生達の喜びは大きいものであった。

学生達が行った作業やその成果を表2にまとめた。

12月9日に神奈川県立かながわ労働プラザで行われた表彰式にはゼミ員全員で出席することにした。表彰式会場ではグループ毎に表彰台で企業の代表者から表彰状と賞金を貰い、その後、他大学の受賞プレゼンテーションの発表を聞いた。プレゼンテーションの一つは横浜市大の「学生が働きたい魅力ある中小企業の条件」であり、もう1つは横浜国大の「ニックネーム『ジェリービーンズ』を用いた横浜の活性化」であった。ともにPowerPointはわれわれのものが優れていたと感じたが、プレゼンテーションを行う話し方や分析手法が優れており、学生達には良い刺激となった。その後立食パーティがあり、学生達は発表企業のテーブルで企業の人達と会話を楽しんだだけでなく、他のグループのテーブルにも参加していた。

表2 各チームが行った作業などと受賞した賞

テーマ	人数	各グループの行った作業など	完成品頁数		賞	賞金
			W (注1)	PP (注2)		
江ノ島の魅力付けと集客向上のための活性化策	1	学生へのアンケート調査、江ノ島へ通って調査	12	18		
カーディーラーにおけるe-コマース戦略の立案	4	若年層に対するアンケート調査	15	32	優秀賞	50,000
携帯電話を用いた新鉄道サービスの検討	4	掲示板などを利用して意見の交換	21	38	優秀賞	20,000
駅構内無線LANによる新規事業の検討	3	無線LAN付きパソコン持参で、喫茶店などで実体験	21	43	優秀賞	20,000
タクシーの利用者実態調査と新規事業提案	2	京急沿線3駅でタクシー利用のアンケートを実施	20	24	優秀賞	30,000
新しい時代の鉄道広告	3	大学生に対してアンケート実施	18	30		
ドラッグストアの取扱商品とその購買分析	3	レシートからの購買分析、POSデータも借りる	15	28	努力賞	20,000
「これからのドラッグストアに求めるもの」の提案	4	HAC店舗の比較調査、全年齢層へのアンケート実施	28	25	最優秀賞	100,000

(注1) Word 1 ページ40文字×40文字

(注2) PowerPoint スライド数

当日いただいた資料には審査結果の資料もあり、そこで初めて今回のチャレンジプログラムは最終的に57チーム212名が参加したことを知った。この資料から大学別の参加チーム数などを表3にまとめた。

参加者学生数としては神奈川大学が一番多く、チーム数としては横浜国大、横浜市大が多かった。横浜市大と関東学院大は応募したチーム全員が最後まで参加したようである。最優秀賞だけしか出さない企業や優秀賞をいくつも出す企業があり、受賞の数でその評価をすることはできない。また応募がたくさんあった企業とそうでもない企業もあり、成果のレベル差はあると考えられる。HACは最優秀賞しかださなかったが、当日の他の企業の賞の出し方を見たためか、HAC分析グループにも後で努力賞ということで商品券を送ってきた。

今回のゼミ活動での成果はまずまずということであった。学生達がチャレンジプログラムに参加した感想と表彰式に出席した感想の一部を【資料】に載せた。学生

達が得たことが分かって貰えるだろう。今回得た賞金は毎年作成するゼミ論誌の足しとし、残りは合宿の費用などに利用しようと言ったことになった。

表3 参加チーム数／参加人数と表彰チーム数

大学名と 参加チーム数・人数	横浜国大		横浜市大		神奈川大		東海大		関東学院大		合 計	
	チーム数	人数	チーム数	人数	チーム数	人数	チーム数	人数	チーム数	人数	チーム数	人数
応募時参加チーム数	21	53	16	64	16	70	7	26	5	23	65	236
最終参加チーム数	16	34	16	64	15	68	5	23	5	23	57	212
最優秀賞受賞チーム数	4		2		1		0		1		8	
優秀賞受賞チーム数	6		7		6		0		0		19	
受賞チーム数合計	10		9		7		0		1		27	

#### 4. チャレンジプログラムへの参加を振り返って

今回のチャレンジプログラムは学生にとっても教員にとっても非常に有益なものであった。再挑戦したいかという教員には負担が大きすぎると言う感も否めない。しかし、学生達が来年の3年生にも是非チャレンジさせて欲しいという意見があることから、また、今回学習したことを活かして負担を軽減させることは可能と思う。教員にとっては学生達が喜んでくれたことが一番嬉しいことである。

ゼミ員全員の参加であったため、優秀な学生もそうでない学生もいる中でのチャレンジであった。しかし全員が何かをつかみ、1年前の自分達と現在の自分達とは明らかに違うと全員が言っている。成長したことを自覚しているのである。また教員から見ても学生達の成長ぶりには目を見張らされた。経営学部の学生達は潜在的に素晴らしい能力を持っている。これを少しだけ引き出して上げるとそれ以降は自分達で伸びて行くことを学生から教えてもらった。

「ダメだしの穂積」と学生から言われているように学生の作成してきた成果物に文句をつけるのが教員の仕事と思っていた。ところが学生達が自主的に多くの作業を行ったことにびっくりして、「つい」学生を「誉めて」しまった。その後の学生達の頑張りに驚いた。誉めて伸ばす教育がいかに大切かをも学生から教えてもらった。



学生のチャレンジするプログラムのテーマは多岐にわたり、教員にとっては未知のマーケティング分析や携帯電話の最新情報など新しいことを勉強する機会にもなった。

研究レポートについては企業が求めていたのは提案書であり、我々が提出したのが論文的であったため、企業によっては評価が低かったこともあった。しかし学生達は論文作成の大変さを理解し、卒業論文の作成には十分に時間をとって取り組みたいと言っている。これにより現在27名という4年生ゼミの学生の卒論指導が楽になることが予想される。これも教員にとっては成果の1つと考えられる。

チャレンジプログラムは企業が良い学生のアイデアを知りたいというだけでなく、企業の求人活動の一環と考えられているという感もある。実際に企業の人から聞いた話では、この企画以外に有名大学の学生に委託研究を依頼しているとのことである。また世界規模のコンテストを利用してマーケティングを専攻している学生を対象に新製品企画を行わせている企画もある【1】。また情報処理学会では産学連携論文特集や社会人学生論文特集を論文誌に載せる試みを行い始めた【2】。このように企業がなんらかの方法で学生の開拓をしていること、また論文として評価していくことは時代の趨勢かもしれない。学生達にとっても様々な機会が与えられ、自分の将来や適性を考えるチャンスにもなっている。企業にとっても学生にとっても学会にとっても良い試みと言える。

2005年の5月の段階で、チャレンジプログラムに挑戦した多くの学生が就職活動を行っている。自分達が参加したテーマ企業ではなく、他のグループが応募した企業へ就職を希望して、内定を貰った学生も2名ほどいる。これは学生達が他のグループの発表練習を聞き、その企業へ興味を持ったことが原因と考えられる。就職先選択にも役に立ったようである。

学生達の現在を見てみると、自信を持って就職活動を行っている。他大学と競争してプレゼンテーションを行ったこと、企業人と何度も打ち合わせしたことは、就職活動で自己紹介をすることにも役だったようである。また履歴書の「学生時代に頑張ったこと」の欄には全員が「チャレンジプログラムへの参加」と書いている。それだけ学生にとっては印象に残ったものと考えられる。また自分達が研究したテーマについての興味も持続している。最近、学生達が提案したアイデアが他の企業で利用されていたのがニュースになったということを教えてくれた。学生達は自分達の研究した企業や技術関連のニュースや新聞記事にも興味を持ってきたわけである。

学生達がグループ活動の意義を理解してくれたのも大きな成果の一つである。実

際にグループ作業がうまく行ったグループが受賞することができた。優秀とされている学生達のグループが必ずしも受賞したわけではない。「グループ活動」、「プレゼンテーション」、「論文の書き方」など、学生達は多くのことを学習し、一回りも二回りも大きくなった。また「やればできる」という自信を身につけてくれたことが嬉しいことである。

2005年度のチャレンジプログラムは参加対象を5大学ではなく神奈川県下全部の大学とするそうである。競争は厳しくなり、今回のように多数受賞することは難しくなるだろう。しかしこのように学生達が大きく成長できる機会を今後も利用していきたいと考えている。

## 5. 謝辞

チャレンジプログラム参加に当たっては多くの方々にお世話になった。

神奈川大学産官学連携推進室の田口澄也課長には本当にお世話になった。チャレンジプログラムへの参加申込締め切りを過ぎているのにも関わらず、企業にお願いしてくださったり、研究レポートの提出を本部にお運び下さったり、さまざまな事務連絡を行って下さった。

12月9日に開かれた第一回神奈川産学チャレンジプログラム表彰式で挨拶された本学副学長中島三千男教授には会場で写真を撮っていただいたり、その後SHC（湘南ひらつかキャンパス）通信への投稿をご依頼下さるなどご配慮いただいた。

前経営学部長海老澤栄一教授には3年次での優れた業績として認められた点から、最優秀賞を得たHAC提案グループを「団体の部の学術・芸術・社会活動部門の学生表彰」として推薦していただいた。それは入学式での表彰となり、表彰状と盾を戴くことができた。

警備員の方々には大変ご迷惑をおかけした。夜遅くまで研究室で作業をしていたため、何時に帰るかを連絡することが必要であった。だが、つい忘れてしまい、お電話をいただいたり、後1時間で帰りますからと夜中の1時頃に電話することがあった。お詫びしたい。

最後に、この原稿は神奈川大学国際経営研究所所長の照屋行雄教授に依頼され、皆さんにご紹介することができた。

また経営学部の諸先生方の教育に対する真摯な取り組み方を見せていただき、自己流ながら少しずつ教育に対して熱意を持って取り組むようになってきたことは、

先生方のおかげと思っている。さまざまな人々のご協力によりチャレンジプログラムに参加できたこととまたその成果を評価していただいたことを心より感謝し、お礼申し上げます。

### 【参考資料】

- 【1】「ゲームで内定ゲット 販売、広告戦略をクリアせよ 業界事情や社風チェック企業は意欲・統率力評価」、朝日新聞夕刊、2005年4月5日、第二版4面。
- 【2】鰭坂恒夫、石田亨、竹林洋一「特集『産学連携論文』・『社会人学生論文』の編集にあたって」、情報学会論文誌、情報処理学会、第46巻、第5号、2005、pp 1117。

### 【資料】学生の感想文から

学生達にチャレンジプログラムへの参加と表彰式への参加ということで感想を書かせた。そのうちのいくつかをあげる。

- ・ グループワークの難しさ、論文の書き方、パワーポイントを用いたプレゼンテーションの仕方など、一つの論文を完成させることによって、企業側から求められているテーマにただ、従うのではなく、それ以外のこともたくさん学ぶことができ、とても良い経験になったと思う。
- ・ 仲間と上手に意思疎通をとることができなかったように思うし、率先して「論文やろうよ」と呼びかけることができなかったことや、個々のスケジュールの管理が甘かったために、締め切り間際に焦って研究室に居残りするなど、反省すべき点が多々ある。もっと皆で意見を出し合い、ある程度時間に余裕を持ってじっくり煮詰めれば、より良い論文に仕上がったのではないかと思う。
- ・ プレゼンテーションに関しては、CFSでの発表において、他大学のプレゼン能力の高さを感じた。自分達のパワーポイントの出来は他を圧倒するものであったが、操作に問題があり拙い発表となってしまったといえる。それに比べ、他大学は、パワーポイントの出来をプレゼンテーションでカバーしていて、発表のための練習を積み重ねていた感があり、自分達に足りないものが何かを知ることができたと思う。
- ・ チャレンジプログラムに挑戦すると決めたにも関わらず、各々の予定を優先するばかりで個人作業になってしまったことや、グループとしてのまとまり

が全体を通して欠けていたことが残念であった。各々の予定を優先する中にも、分担ということを頭において、もっと計画的に進めることができれば、偏ることのないグループとしてのより良い論文作りを行えるのではないかなと思う。このことは、ゼミ活動や学校生活の中でも重要になっていることなので、これからも忘れずに心掛けていきたい。

- ・ 私たちは夏休み中にインターネットの掲示板を利用し、いいアイディアが思いついたら書き込み、グループみんなで討論するという方法を利用しました。この方法は客観的な視点で企画を考えることができること。みんなの都合をあわせなくてもよいこと。実際集まってディスカッションしたときに煮詰まっても無駄な時間をすごすことがないというメリットがありました。しかしデメリットとして、やはりみんなのやる気次第ではまったく話し合いがすすまないことであり、夏合宿ではこの結果非常に中途半端で即席PPを作成しプレゼンテーションを行ったことを後悔しました。あの時は締め切りが近づくにつれ胃が痛かったです。
- ・ グループでの論文作成の経験は社会人になったときに非常にプラスになると感じています。何か一つのことを達成するために非常にチームワークが大切であるが、そのチームワークを十分に発揮することが難しい。またチームワークを発揮するにはリーダーシップやコミュニケーション等が大切などわかった気がします。意見が衝突したときにどのように意見をまとめればいいか少しの経験になりました。また論文の作成での経験は自分の就職活動においても、自己分析や自己PRなどで非常に役に立つと感じます。
- ・ 発表は物凄く長いものになってしまい、発表している自分達でさえ、飽きている感じを受けましたが、発表し終わった後はこれだけ頑張って調べたのだなという満足感でいっぱいになりました。この時、一人でやるのと違うので、複数人で行なうことは心強いし、また喜びも大きいのだと感じました。
- ・ 論文や図表も書き方や決められた枚数内におさめるなど、後から後から問題が浮上するというのが繰り返しありました。改めて論文の難しさを実感しました。
- ・ 論文が完成し、それを本社で発表する際は緊張しましたが、たくさんの学生さんの前で発表したことはとてもいい体験になり、度胸も付いたように感じました。
- ・ 論文は書いていけば枚数に達すると思っていましたが、書くことが尽きたり、

書きすぎて文章を削らなければならなかったりと、時間を要するものであり、また言葉使いや文章の構成なども絡んでくるのでなお、時間を要することになり、完成するまでが長くなるのだと、このチャレンジプログラムで感じました。

- ・ 新案を発表、しかしそれは無謀な挑戦でした。いとも簡単に撃沈した私たちは、ライバルの横浜市立大学の方々と力の差を実感し、さらなる新案を求めることとなりました。そういえば東海大学もいましたけど、最終発表時には自然消滅していました。
- ・ トヨタに訪問し、現場で活躍しておられる社会人の方達と話し合い、若年層新規開拓案を書き上げていきました。社員の人達と話していると、自分のコミュニケーション能力、リーダーシップ能力、プレゼンテーション能力などが浮き彫りになり、社会人と学生である自分とのレベルの違いを痛感しました。自分よりレベルが高い人の集まる環境に身をおくことで、厳しく自分を律し、より責任感が強く湧き上がりました。
- ・ 人と人が協力することで「1+1=3」以上の成果をもたらすことができると感じました。1人では味わうことができない喜びと達成感を得ることができました。
- ・ グループワークを行う上で必要となってくることは、リーダーシップというよりはチームワークではないかということを今回の論文製作において感じた。個人個人が問題に取り組む姿勢になることが重要であり、これに加え、皆で話し合うことによって良い論文に仕上がるのだといえる。
- ・ 表彰式では、入賞者名簿を事前に見た段階で、横浜国立大学と横浜市立大学の入賞者数が圧倒的に多かったが、東海大学や関東学院大学がほとんど入賞していないのに対して、神奈川大学が7チームも入賞していたことに、「神奈川大学も捨てたものじゃない」と驚きを覚えた。
- ・ 今回の多くの反省点から自分自身が、よりフレキシブルに物事を見ることができるようになったので、この反省を活かして次ぎへつながればよいと思った。
- ・ 会場に到着後、第一印象をして、自分が来るような場所ではないような空気が漂っていてとても気疲れしそうになりました。見渡す限り、さまざまな課題を提供して頂いた企業の会長、社長、専務など重役揃いで驚きを隠せなかった。今思うと、あの場所こそが就職活動のチャンスだったのかもしれない…。



重役に名前を覚えてもらえればもしかしたら…。という気がして後悔したと思っている。

- ・ 初めて行う「アンケートによる集計から行う分析」でアンケート集計の難しさを知りました。アンケートを取る対象年代も考えなければならないし、そのとおりの年代にアンケートをとれるわけではありません。書いてくれたとしても、きちんと最後まで書いてくれているとは限らないし、こちらの質問と違った答えを回答する人もいました。そのため、実際に取ったアンケート数より使えるアンケートは減少しました。ほしい結果が得られない質問事項が、集計のあとにわかるということも学びました。
- ・ ただの思いっきだけでは文章は書けませんでした。
- ・ プレゼンテーションに楽しさがなかった。ダラダラとプレゼンを打つのは聞きたくないと改めて感じ、反面教師になった。もう1つは人間味があふれる方だった。実に勉強になった。あんな引き付けられるプレゼンテーションができるようになりたいと思う。
- ・ この論文制作全体を通して、多くの人達の協力を得て論文完成まで至ったことを切に感じた。ゼミの仲間達からKJ法によって案を出してもらったことや何度も読み返してもらい意見を求めたこと、また穂積教授に何度も校正をお願いし、注意を受けたことなど、全ての人達に支えられて自分達が論文制作に打ち込むことができ、完成させることができたのだと感謝の思いでいっぱいである。これから、卒業論文に臨むに当たっても、仲間からの意見や穂積教授の助言など全てのことを参考とし、より良い論文を仕上げるができるように努力していきたい。
- ・ 横国大や頭のいい大学の学生が、企業の重役の人と楽しそうにしゃべっている。きっと普通に会話しているだけなんだろうが、自分には、「就職の際には、どうぞよろしくお願いします。」と今のうちから、自分の顔を売っているように見えたのだ。しかし後々考えてみると、いい発表をした学生は当然一目置かれる存在になる。そうするとその企業に面接に行ったときには、「ああ、あのときの学生か。よくがんばったね。」といった流れになり、就職活動にとっても有利になるのだろう。そこまで計算していた学生はたぶんいないであろうが、就職活動をうまくやるコツはそういったところにあるのかもしれない。
- ・ 論文作成で分担して論文を作成すると論文の流れ等の情報交換不足でおかし

な論文ができてしまう点が非常に苦勞しました。また論文を分担した場合、メンバそれぞれのやる気次第で論文の成果も異なることが大変でした。感想としては、企業に評価され表彰されたというのが非常に嬉しかった。提案ということで分析はさして行わなかったが、企業に受け入れられる提案ができたので良かったと思う。また、他大学のプレゼンテーションを聴けたことも、普段学校内におけるゼミ活動や講義とは違い良い経験ができた。他大学がどのような研究方法をとっているか、また、どのようなプレゼンテーションをするのかを見ることができたため、自分達に足りない点などを発見でき、大いに参考になったと思う。